

KANAGAWA HOHYUH CLUB

神奈川県放友会

Newsletter



Vol.10 No.4. Oct. 2017
第 40 号

神奈川県放射線友の会 (略称 神奈川県放友会)

〒231-0033 横浜市中区長者町 4 丁目 9 番地 8 号

ストーク伊勢佐木 1 番館 501 号

TEL 045-681-7573 FAX 045-681-7578

発行人 長谷川 武

発行日 2017(平成 29)年 10 月 1 日

動いているぞ！ 神奈川県放友会

神奈川県放射線友の会 監事 橘 亨

まず初めに「神奈川県放友会」創立 10 周年にあたる記念すべき Newsletter 第 40 号の巻頭言を書けることはたいへん光栄である。

と言うのも、私はこれまで創立以来 Newsletter の一愛読者で名前ばかりの会員でしかなかった。H21 年 10 月に開催された放友会主催の神奈川県総合防災センター見学ツアーに参加したのと、H28 年 10 月の神奈川県立ガンセンターでの講演会・重粒子線施設見学に参加した位であり、そんな私が巻頭言をどう纏めれば良いか？と思った・・・。

昨年の H28 年 4 月の神奈川県放友会の総会に初参加し、メンバー皆さんの活躍ぶりに大いに感銘を受け、私も何かやらねば、何かアクションを起こさねばと強く感じた。もう一つは、多忙な現役時代を終え、定年退職後も勤務していたが、勤務日数も徐々に減らし、ようやく少しのゆとりが持てるようになり、趣味以外に何か行動しなくては行けないと、自治会長、町内会理事を引き受け、恥ずかしながら地域や町内の現状、自分の住む近所のことをこの年齢になって初めて知り、余りにも無知であったため、積極的に公園の清掃や町内会の行事に参加するようになった事である。

さて、前置きはこれ位にして改めて「神奈川県放友会」その歴史を辿るべく、平成 19 年 11 月設立当時の Newsletter 創刊号から 39 号まで読み返してみた。どの号も中身の濃い素晴らしい内容に圧倒され、読み切るのが丸々一日かかってしまった。

神奈川県放友会の歴史が Newsletter にはしっかりと記録されている。近年はインターネットのおかげで、無くしてしまった何年も前の Newsletter がホームページでいつでも読み返せる。Newsletter を一冊に纏めるだけで立派な冊子になりそうである。

振り返ってみると、「神奈川県放友会」は、**過去・現在・未来を語り合う「憩いの館」**とし、会員の情報交換を通して医療技術者の環境改善・身分保障等の改善、また生涯学習の場として、組織として地域社会に貢献することを想定して創立したとある。

活動の実績としては、幾度かの見学会、体験学習、懇談会、講演会の実施と共に、会誌「神奈川県放友会 Newsletter」の定期発行及び放射線に関連する啓発活

動の一環として、2 冊の「食と放射線」と「検診に携わった放射線技師の医療体制への鼓動」を出版した。試行錯誤しながらもこれだけの実績を残してきている、これは大いに称賛に値する。

10 年の歴史を振り返る中で、大きな動きがあった。2011 年 3 月 11 日、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震発生。東日本大震災と名づけられ、この地震により巨大津波が誘発され、前代未聞の福島第一原発事故が発生した。この時、長谷川会長は「神奈川県放友会の組織活動として、何か貢献出来るものがないのか。放射能汚染による県民の不安に対し、放射線を学んだ特殊な我々集団が、何か貢献すべき行動があるのではないかと。皆様教えて下さい。」と声を大にし悲痛な思いで会員に呼びかけた。そしてその年 10 月、県放射線技師会・地域放射線技師連絡協議会・湘南放射線技師会・神奈川県放友会は一丸となって市民の放射線汚染に対する不安解消の一助になればとの思いから「茅ヶ崎市内の公園を中心とした大気中放射線量の測定」を実施し、茅ヶ崎市長にその結果を報告した。また H25 年 4 月には神奈川県議会議員団と福島県における「食と放射線」安全・安心への取り組み視察団に加わり、福島県を視察し、その後「食と放射線」第 2 巻を発行した。「神奈川県放友会 Newsletter」第 37 号巻頭言にて、神奈川県放友会創立 10 周年を迎えるにあたり「放友会の存在の向上を確かなものに・・・」と長谷川会長が述べられているが、**確実に神奈川県放友会は動いている。確実に存在の向上は図られていると誇りを持って断言できるであろう。**

「放友会」の特徴は、老人会にあらず、定年退職したシニア世代と現役の同職仲間、更には本会の趣旨に賛同して頂いた方々と、幅広いメンバーにより構成されている、この特徴を最大限に生かし高齢化社会が進む中、今後は在宅医療等にも目を向けていく必要もあるかもしれない。

「憩いの館」で神奈川県放友会の更なる未来を語ろうではないか。

最後にコメディカルの中から放射線技師をなんとしても国政に送り出さねば我々の未来は開かれぬ、候補者への最大限の支援で実現していこう。

真偽判断する手間惜しむ

いまだ残る原発デマ拡散…早野龍五・東大教授に聞く



「新しいことを発言したり行ったりする時、具体的に誰かの顔を思い浮かべ、その人が迷惑しないかを考えるよう心がけていた」と振り返る

早野 龍五 教授

昨年の米大統領選の前後から、「フェイク（偽）ニュース」「ポスト真実」という言葉が多く聞かれる。いずれも事実・真実が軽んじられる風潮を表すが、日本でも東日本大震災の直後から、不確かな情報が大量に発信された。そんな状況に対抗すべく、科学的で冷静なツイートを行うなどの活動を続けてきた物理学者の早野龍五・東大教授は、正しく知ることの重要性を指摘している。（小林佑基）

早野教授は、東京電力福島第一原発の事故に関連し、「福島には子供を連れて行かない方がいい」などのデマが、今もしぶとく流されている現状を憂える。避難地域の外側に住むことも、市場に出ている福島産の作物を食べることも、出産することも安全だと言えるのに、「デマを流す側は考えを変えるつもりもなく、一種のシンパを形成している」と指摘。全体の報道量が減る中で、後年、正しい情報よりデマが残りかねないとの懸念から、ツイートを続けている。

デマが拡散しやすい理由について、「知る」ことの基本が危うくなっているからだ」と説明。インターネットの発達で、原資料に遡って真偽を自分で判断するような手間を惜しむ風潮があるとする。「何をもって『ものを知った』ことになるのかが分からず、多くの人が悪気なくデマの拡散の片棒をかついでいる」とし、立ち止まって調べてみる重要性を訴える。

教育の重要性にも言及。放射線学習は、2012年度から本格実施された学習指導要領で復活するまで、約30年間、義務教育（中学校理科）では原則として行われてこなかった。そのため「普通の生活でも自然界の放射線を浴びているという基本的知識がなく、『ゼロでなければ危険』といった考え方がまかり通ってしまった」と悔やむ。

こうした「原理主義」が、避難指示解除の際にも出たと振り返る。11年8月、原子力安全委員会（当時）が政府に避難指示解除の条件を助言した際、住民の合意形成を入れた。このため反対する人がいれば避難指示解除はできなくなり、政府は早い段階で「リスクはゼロではな

いが少ないので、帰りたい人は帰っていい」と言えなくなったというのだ。そのため生活や家族が壊れた人が多く生まれ、社会も分断されたと残念がる。

もともと放射線は専門外だったという早野教授は今月末、東大を退職する。事故後に「博士号をもう一つ取れるほど」勉強し、「事故前までの60年間と同じぐらい」多くの人と出会った。この間、学校給食の放射性物質検査を提言したり、乳幼児専用の内部被曝計測装置を開発したりもして、ツイッターのフォロワー（閲覧者）は約15万人になった。多くの共感の一方で、激しい罵りも受けたが、冷静でいられたのは、距離感をもって物事を見ていたからだ」と振り返る。「自分が正しいと思っても立ち止まって、自分で自分の間違い探しをすることが必要では」

2017年3月13日 読売新聞朝刊

【震災6年 災害と日本】

死見つめ生まれる強さ…宗教学者 山折哲雄氏 85歳



（やまおり・てつお）
1931年生まれ。東北大卒、
国立歴史民俗博物館教授、
国際日本文化研究センター所長など歴任。
宗教学、思想史を専門とし、近著『ひとり』の哲学」など著書多数（平博之撮影）



犠牲者を悼み手を合わせる人たち

（宮城県東松島市で、2011年4月3日撮影）

日本は世界有数の地震・火山国であり、自然災害は宿命ともいえる。東日本大震災から6年。この間も熊本地震など各地で犠牲者が出た。私たちはこれまで災害とどう向き合い、これからどう向き合うのか。識者や関係者に聞いた。初回は宗教学者の山折哲雄氏。（聞き手・編集委員 結城和香子）

自然と歩む国 育んだ無常／被災地の若者に託す希望

震災の1か月半後、三陸海岸などを訪れた。ご遺体を埋め木の札を立てた無数の墓標を前に、呆然と立ちすく

む遺族の方々。彼方には晴れた美しい海。死者を悼む鎮魂の、万葉の挽歌が浮かんだ。万葉人は、死者の魂が屍から出て、海や山の彼方に静まると信じていたから鎮魂の歌が作れた。現代人は、魂の行方を信じていない。その悲劇を思った。

あれから 6 年。死者たちの無念から、生き残った者たちの問題に、重点が移り始めている。今や社会が、生き残った者のこころを慰め励まそうと、一種の挽歌を歌っている。

《母方の実家が岩手県で、京都で阪神大震災も経験した山折氏は、様々な活動を通じ東北に足を運ぶ》

被災地へのモノ、カネ、人の流れが、次第に縮小されていこうとしている。残されるのは被災者たちのこころの問題だ。その恐れと不安は、解決に向かっていない。

科学技術と人知を尽くし、防災減災の備えが進む。それでも「想定外」のリスクはゼロにはならず、安心安全の境地は得られない。まだらな復興も、生きることへの不安を生む。結局心の平静を得るには、何が起きても「想定内」だと、受け止める覚悟を持つほかはない。それが、自然災害と歩む日本人が培ってきた、無常観であり死生観だった。生と等しく死をも見すえる心構え、と言ってもいい。

自然に抱かれる、土に返る。日本人が持つ死生観は、仏教やキリスト教が極楽だ神だと言い出す前に世界各地に存在した、天地万物に命ありという普遍的な考え方に通じる。

ところが今の日本社会では生きることばかり強調され、死をタブー視する風潮がある。教育界では米国で意識が高まる死の教育が緒に就かない。医療界では安楽死等の問題が禁句のまま。宗教界は「最後は死が待つ」と引導を渡す本来の役目に後ろ向きだ。死の問題は法と人知を超えるのに、死を定義しようとする。被災地の問題の根底にも、死を見つめようとし、こうした社会のあり方がある。

◇3 層構造

日本は、災害にあつて人々を守る知恵として、風土的な 3 層構造を作り上げてきた。縄文的森林社会、弥生的農耕文化、そして近代。新しいものが古いものを根こそぎにするのではなく、これらが相互的な関係を保ち、知識や生活スタイルを、危機に対し選択的に繰り出し対応した。それが日本人の意識や文化芸術の特色にもなった。白黒の二元論ではなく中庸の考え方が生まれ、自然を征服する気は起こさず、その「厳父と慈母の顔（脅威と恵み）」と、謙虚に付き合ってきた。

日本の歴史で、危機に対しどう人はあるべきかという死の問題を最も深く考えたのは 13 世紀の法然、親鸞らだ。関東大震災後の 10 年間は、寺田寅彦らを輩出した。

《関東大震災の調査を行った物理学者の寺田（1878～1935 年）は、災害に対する日本人の精神性を「天然の無常」と評した》

今の日本人は、震災後何を学んだか。法と行政、経済の観点からしか問題を議論しない、知的世界の貧しさを思う。

◇神探し

死生観も変化している。新幹線で、若い女性がコートかけに、荷物のように骨箱をかけていた。葬式も告別式もしない「直葬」が増えた。代わりに多くの人が写真を大事にする。霊魂は信じないが死んだ人には身近にいてほしい、そんな願望の表れだ。無神論にもなれず信仰を持つこともできない、現代の日本人の姿だ。

社会のネット化、人のつながりのネット化が拍車をかける。土居健郎のベストセラー『『甘え』の構造』（1971 年、「甘え」を通じ日本人心理と人間関係を論評）が今世紀に入り売れなくなった。甘えが生まれる二者の関係が崩れ、相手という言葉が廃れて他者になってしまったからだ。対人関係が希薄になった。

AI（人工知能）が今、将棋や囲碁の名人を負かし、急速に人間化している。無神論の時代に、万能の超人間という、新しい神探しが始まったのかもしれない。ネット等に依存する人間には、管理してくれる神が必要になるからだ。

◇決断力

人間を含め万物には、必ず終末、つまり死がやってくる。そのことを冷静に見つめられれば、その中から強さと希望が現れる。それが日本人の死生観の根本だったはずだ。

先日被災地の学校で語った。準備も訓練も大事。しかし最後はどんな規模と形の災害が来るか分からない。大切なのは子どもたち一人ひとりが、災害と死が迫った時、どんな決断力と覚悟を持てるかだ。

団塊までの世代は、欧州コンプレックスや模倣から始める習性が抜けない。私が期待するのは、そこから解放された 20 代、30 代までの世代の可能性だ。特に被災地では、震災を体験した子どもたちが高校生、大学生になる。生と死の問題に非常に敏感なこの若い世代が、この 6 年間にどういう成長をし、死生観を身に付けたのかに希望を見たい。

こころへのエール

自分の心を救えるのは自分だけ。死という終焉を含む、現実から目をそらさないでと山折氏は言う。厳しいようで、それは根源的な人間へのエール、日本人が魂の底に培ってきた強さへの信念だ。

死とは全ての過去と未来の喪失の重みだ。情は観念では割り切れない。でもひとり踏み出す時、限りある今を生かされているという思いがきっと力になる。

私たちは死と向き合う勇気を次世代に、伝える役目も負うのだと気付かされる。（結）

2017 年 3 月 14 日 読売新聞朝刊

復興6年！東日本大震災被災地を訪ねる

・・・気仙沼・陸前高田・大船渡・・・

福田 利雄（会員 No11）

東日本大震災（地震、津波）による福島原発事故から6年、いまだに続く風評被害、避難者へのいじめ等について話し合う機会があり、その中で本会長谷川武さんが小中高と過ごされた故郷が津波の被害を受けた事を知った。津波により親戚の方が犠牲に、同級生の方の家が流されてしまった、通学に利用していた駅舎が流されてしまった・・・津波の凄まじい被害の話を聞き、もし機会があれば被災地をこの目で見て、災害に合わせた方々の生の声を聞きたいね・・・と話し合っていたのである。2017年6月7日～6月9日(2泊3日)の予定で、宮城県気仙沼、岩手県陸前高田と大船渡の被災地を訪ねる旅が企画された。先輩であり友人である長谷川武さん、早瀬武雄さんと小生の三人の旅である。

宮城県気仙沼

東北新幹線一関駅から駅レンタカーを利用し、気仙沼漁港を目指した。市内に入り気付くのは工事の多さだ。いまなお随所で「かさ上げ」工事が行われており、空き地も目立っていた。漁港関連の施設は、ほぼすべてが津波で破壊されたと聞いた。岸壁、魚市場等は新しく整備されていたが復興の道はまだまだ遠いと感じた。「気仙沼お魚いちば」で気仙沼名物のランチを食し、ふかひれスープ5袋お土産に買い求めた。



市内に入り気付くのは工事の多さだ。いまなお随所で「かさ上げ」工事が行われており、空き地も目立っていた。漁港関連の施設は、ほぼすべてが津波で破壊されたと聞いた。岸壁、魚市場等は新しく整備されていたが復興の道はまだまだ遠いと感じた。「気仙沼お魚いちば」で気仙沼名物のランチを食し、ふかひれスープ5袋お土産に買い求めた。

三陸復興国立公園: 唐桑半島

気仙沼から陸前高田市に向かう途中、太平洋に大きく突き出した唐桑半島に寄り、素晴らしい水平線とリアス海岸と断崖絶壁の迫力のある景色を楽しんだ。



三陸海岸一帯を震災からの復興および被害の伝承を目的として、2013年に公園の名称が陸中海岸国立公園から三陸復興国立公園に変更された。

唐桑半島

上: 巨釜半造
（おおがまはんぞう）
下: 大理石海岸



陸前高田「奇跡の一本松」

気仙沼から約20km走り、陸前高田市の「一本松茶屋」を目指した。凄く広い駐車場に車を停め、復興工事現場の中を歩いて約10分のところに奇跡の一本松があった。



広田湾に面したこの辺りは、高田松原と称し約7万本の松の木が茂り、日本百景にも指定されていた景勝地であった。

津波の直撃を受けほとんどの松の木がなぎ倒され壊滅した。松原の西端近くに立っていた一本の松の木が津波に耐えて立ったままの状態が残った。「奇跡の一本松」と呼ばれるようになった。震災後、根が腐り枯れ死となったがモニュメントとして複製され元の場所に再び立てられている。一本松の近くには壊れた建物がそのままの状態に残されていた。「奇跡の一本松」と同様、震災と復興の象徴として保存伝承されて行くものと思われる。松原のあった所には 海拔 3.0m と 12.5m、全長 2km に亘る巨大な防潮堤が二段構えで造成されていた。広田湾の海は全く望めなくなってしまった。防潮堤は現在工事中であり立入禁止であった。二つの防潮堤の間には松林公園が、海岸には白い砂浜が再整備される計画の様である。

碁石海岸 民宿「海楽荘」

「奇跡の一本松」を見学し、岩手県大船渡市末崎半島碁石海岸にある民宿「海楽荘」に向かう。カーナビが指示する道案内と大船渡末崎が故郷である長谷川さんとの道案内が所々で異なるケース（笑）があったが被災地の被害状況を見ながら、また、三陸のリアス海岸の岩と海の景色を見ながら、無事に宿に着く事が出来た。宿には、震災工事関係者の方が多く宿泊していた。民宿には2泊し、温泉と新鮮な海鮮料理を堪能した。

大船渡末崎(まつざき)半島細浦湾

2日目、朝7:45に宿を出発、あいにく小雨混じりのどんよりした曇り空であった。長谷川さんが通った中学校の裏に設置された震災被災者用の仮設住宅



を見に出かけた。現在、仮設住宅は使用されていなくひっそりと佇んでいた。仮設住宅区域内は「立入禁止」措置

がとられており、金網フェンス越しの見学となった。業者の方が解体撤去の作業のため出入りしていた。

仮設住宅を目にして、6年前、震災に遭われた多くの被災者の方が不自由な環境の中で、心に傷を負って、ここで生活されていたのだな〜と、あらためて、自然災害、地震、巨大津波の怖さを実感したのである。



長谷川さんが生まれ育った大船渡末崎細浦湾にも約 10m 近くの津波が押し寄せた。長源寺というお寺からの風景であるが「津波到達の地」の碑が

立っている。眼下にあった多くの民家は津波で流され家一軒見当たらずに空き地となっている。下に見える道路は JR 大船渡線の電車が走っていた所である。津波により細浦の駅舎と線路は流失した。現在、舗装されたバス専用道路となっている。三陸鉄道大船渡線の盛駅〜気仙沼駅間が JR バス運行(BRT)による復旧となっている。BRT:バス高速輸送システム *Bus Rapid Transit*

東日本大震災を語る・高橋亨さん



長谷川さんの従兄にあたる高橋亨さん宅を訪ね東日本大震災の話聞く事ができた。今年 95 歳になられるが背筋がピンとしており話し方も知的でインテリジェンスが感じられた。旧制早稲田大学を卒業され、長谷川さん等の恩師でもある。現在においても地元の名士との事である。6年前の震災では、息子さんである岩手県大船渡署高橋俊一警視が津波の犠牲となり亡くなっている。高橋俊一警視(殉職後警視長)は陸前高田市の幹部交番の所長で、津波発生時、住民の避難誘導に当たっていた部下に避難するよう指示したが、自らは交番に残り無線で避難誘導指示を続け津波の犠牲となった。遺体は1ヶ月後に自衛隊により同市沖で見つかった。発見された場所は夢の中に息子さんが現われ案内してくれた・・・と、高橋亨さんは悲痛な思いで語ってくれた。今回の震災で、陸前高田市の警察官4名が殉職されたとの事であった。

大船渡市魚市場



細浦の漁港の復興状況を見学し、大船渡湾に沿った道路(浜磯街道)をゆっくり走り大船渡魚市場に向かった。大船渡湾にも 10m を超える大津波が押し寄せ、湾沿岸の漁業関連施設、中心市街が大きな被害を受けた。6年経過し、がれき等はすべて撤去され街はきれいであった。地形によるものか陸前高田市に比べ湾沿岸には新しい建物が多く建っていた。

大船渡市魚市場も近代的な巨大な施設に建て替えられていた。市場施設内には震災記録の展示室、見学デッキ、レストラン等が有り観光要素を含んだ施設であった。横浜南ロータリークラブの方々が視察に来られていた。

三陸鉄道大船渡線(JR バス運行 BRT)

東日本大震災で大船渡線は壊滅的な被害を受けた。気仙沼〜盛間の鉄道の廃止がほぼ決まり、現在は JR バス運行(BRT)となっている。大船渡駅と盛駅を訪ねた。大船渡駅周辺には大きな建物が建築中であり活気があった。長谷川さんは大船渡盛高校の出身である。



JR 大船渡駅

震災前は立派な駅舎があったと思われるが、今は簡単なバス専用駅となっていた。



JR 盛駅

大船渡線(BRT)盛駅〜気仙沼駅の起点であり、三陸鉄道南リアス線(電車)盛駅〜釜石駅の起点でもある。駅員さんに震災時の話を聞く事ができた。

碓石海岸での同窓会 13:00〜

末崎町に居住する長谷川さんの4人の旧友(同期生)との同窓会が碓石海岸の食事処「岬」で開かれ、同席する事が出来た。楽しく食事し、お酒を酌み交わし、歓談した。6年前の震災時、押し寄せて来る津波を4人の方皆さんが直に体験されているという話、自分の家が津波により流出した話、自分の妻が逃げ遅れ波に飲まれたが一瞬の幸運で手をさしのべて助ける事が出来た話など、貴重な体験談を聞く事ができた。たんと話して頂いたが、一生、心の傷として深く残る出来事であったと理解している。歓談を終え、わらび畑を栽培している方のご厚意で「わらび採り」を体験する事ができた。

碓石海岸:穴通磯

3日目、青い空と青い海がまぶしい朝を迎えた。碓石海岸は迫力ある海岸線が魅力で、奇岩、巨岩、断崖絶壁など観光スポットがたくさんある。限られた時間であったが雷岩、乱曝谷、穴通磯等を見学する事が出来た。今回の旅では、駅レンタカーを利用したが有効な移動手段であったと思う。



・・・訪ねることが、東日本大震災復興に協力!ぜひ・・・

創立 10 周年記念事業

「食と放射線」

-放射性物質の汚染実態と風評被害-

第 3 版出版

神奈川県放射線友の会（略称 神奈川放友会）は創立 10 周年記念事業として「食と放射線」-放射性物質の汚染実態と風評被害- 副読本を出版することになりました。

この夏は、「食と放射線」副読本と創立 10 周年事業の準備で理事会が久しぶりに老人パワーで盛り上がりました。

この副読本は

福島原発事故から 6 年半が経過した現在、福島産の農水産物などの放射能測定体制は整い、その食品からは放射性物質汚染は皆無となっています。

しかし、国民の一部には、まだ「福島産の農水産物は怖い」という誤解が解けず、価格が下等評価されたり、販売制限がされたりしています。これは放射能・放射線・放射性物質を正しく理解しない風評被害が大きな課題としてあります。

さらに、食品だけの問題ではなく、原発事故による放射能汚染の無知や誤解から、福島から避難している市民に対する非常識な発言や生徒に対する学校でのいじめ問題が多発している現状があります。

これらの非科学的な放射能・放射線・放射性物質の誤解や福島産農水産物の風評被害、いじめ問題等を払拭するため、神奈川放友会はこの副読本を発行し、再度、放射線への正しい理解を求めて、「食品への放射性物質汚染の実態」、「風評被害や関連するいじめ問題防止」に資するものです。



2017 年（平成 29 年）9 月 15 日発行いたしました。1 冊 1,000 円（送料別料金）で販売しています。

放友会役員又は、神奈川放友会事務所にご連絡頂ければ対応いたします。

TEL 0467-681-7573(技師会事務所)

食と放射線 -放射性物質の汚染実態と風評被害- 副読本	
推薦の言葉	公益社団法人 全国自治体病院協議会 常務理事 茅ヶ崎市立病院 院長 仙賀 裕 1
はじめに 2
序章 東日本大震災に伴う福島第一原発事故5
Part I 福島の風評被害を考えてみよう	
第 1 章 放射線被ばくに関して誤解はないか6
第 2 章 福島 新たな風評被害 17
第 3 章 「安全・安心への取り組み」と風評被害21
第 4 章 放射線影響に関する「感想と意識調査」27
Part II 「放射能」と正しく向き合うために	
第 5 章 太古の昔から自然界に存在する放射線 37
第 6 章 放射線の人体への影響 43
第 7 章 福島第一原発事故の放射性物質による環境汚染 53
第 8 章 食品の放射性物質汚染 63
第 9 章 放射線の管理・防護に関する規制と対応 73
第 10 章 いろいろな放射線を測る 83
第 11 章 暮らしや産業での放射線利用 93
第 12 章 放射線に関連する国際機関99

みんなの広場

■ 公益社団法人神奈川県放射線技師会 創立 70 周年記念第 17 回神奈川放射線学術大会 未来へつなぐ放射線医療 ～信頼と技術～

日時 平成 30 年 2 月 4 日 (日)
学術大会会場 ワークピア横浜
祝賀会会場 ホテルニューグランド

■ プルトニウム事故

原子力開発機構大洗研究開発センターで、2017 年 6 月 6 日国内最悪の内部被ばく事故があった。

大洗研究開発センター燃料研究棟分析室（管理区域内）で半面マスクを着用した職員 5 人が、貯蔵容器内にある核燃料物質の点検作業中に、ビニールバックの破裂を確認したので、被ばくしたと理解し、すぐに身体サーベイを行った結果、全員の手足から汚染を確認しました。

5 人中 3 人の作業員から最大 24Bq(α線)の鼻腔内汚染を確認、更に核燃料サイクル学研究所で作業員全員に対し肺モニタで測定したところ、Pu-239 と Am-241 について、最大 2.2×10^4 Bq と 2.2×10^2 Bq が測定されたと 6 月 28 日に新聞報道されている。

被ばくは皮膚への付着被ばくであることが判明したとして、内部被ばくではなかったことで健康的にはひと安心したと伝えられている。

しかし、6 月 7 日～13 日、18 日～26 日に入院しており、プルトニウムの対外排泄を促す薬剤を投与する治療を受けていることが分かっています。



写真には「ビニール袋が破裂したケース」や「周囲に飛び散った黒い物」が写っている。

■ 医療被曝 必要以上の検査を減らしたい

適正な放射線管理の下で、
先端医療技術の恩恵を受けたい。

日本学術会議が、病気の検査などに伴う医療被(ひ)曝(ばく)の低減を目指した提言をまとめた。

政府による検査実態の把握や医師教育の充実など、4 項目の取り組みを求めている。日本は医療被曝が突出して多い、と海外から指摘されている。年平均で 1 人当たり約 3.9 ミリ・シーベルトと推計され、世界平均の 0.6 ミリ・シーベルトを大きく上回るという。

政府は、世界最高水準の医療の実現を目標に掲げる。病気の検査に欠かせない放射線を、賢く使う態勢作りを急ぐべきだ。提言が焦点を当てたのは、CT(コンピューター断層撮影)検査だ。体の周りからエックス線を連続して照射し、体内の詳細な断面を撮影する。内臓に形成された微細な癌(がん)でさえ検出可能だ。造影剤を用いれば、体の奥の細い血管まではっきり映し出すことができる。脳や心臓の血管の異常箇所を見ながら手術する例も増えている。医療を飛躍的に向上させてきたことは間違いない。1 回の検査で浴びる放射線量は、10 ミリ・シーベルトを超えるケースがある。1 回だけなら問題はないが、概(おおむ)ね 0.1 ミリ・シーベルト以下にとどまる胸部のエックス線撮影に比べて、けた違いであることは事実だ。検査を繰り返せば、被曝量は軽視できなくなる。病気の種類や症状により、撮像の精度を抑えるなど、適切な利用が求められる。

提言は、無用な CT 検査が実施されている可能性を指摘する。

国内に導入されている CT 装置は、世界最多の 1 万台以上だ。人口当たりの設置数は、先進国平均の 4 倍以上に達している。これを反映して、検査数も多い。人間ドックでの利用を含めて、年間 3000 万件もの検査が実施されていると推定される。医師には、CT 検査が真に必要な患者かどうかを見極める判断能力が求められる。検査を担当する診療放射線技師の経験や専門的知見を生かせるチーム医療を普及させて、被曝低減につなげたい。

CT 装置は検査時の放射線量を表示する機能を備えているが、多くの病院では記録を残していない。患者への説明も不十分だ。全病院の検査データを集積して分析し、適正な検査につなげる仕組みが必要ではないか。放射線医療の専門組織が提唱しているが、対応は遅れている。

少ない放射線で検査できる新型 CT 装置の開発などに、官民を挙げて取り組むことも大切だ。

2017 年 8 月 21 日 読売新聞

編集後記 ☆ ★ ☆ ★

猛暑・不順な天候の夏が終わり、天高く馬肥える秋になりました。放友会は創立 10 周年記念事業準備が行われています。記念式典に多数のご参加を期待しています。

【編集委員】 櫻田 晃 小嶋 昌光 仙臺 真紀夫

＜広報＞

創立 10 周年記念式典

創立 10 周年記念事業実行委員会

会員の皆様へ

本会の創立は 2007 年（平成 19 年）11 月 17 日です。

本年は創立 10 年目を迎えますので、暮れの 11 月 11 日（土）に「創立 10 周年記念式典」を開催いたします。

「神奈川県放射線友の会（略称 神奈川放友会）」は現在 73 名の会員と賛助会員 2 名、1 社ですが、「放射線の安全・安心に関する基礎知識の社会的啓発活動」と、気楽に集まり「過去を語り、現在を語り、未来を語ろう」そんな「憩いの館」を自負しながら、シニア世代のパワーを活用する社会貢献の活動を目標としております。

高齢化社会の中で、今年は団塊の世代が 70 歳になる節目の年でもあります。定年退職後も放射線技師業務活動と共に、社会活動等に活躍されている会員が多く参加しています。神奈川放友会は主に定年退職された方々に「集いの場を提供」する目的からも、十分な能力をお持ちの皆様を迎え、これまでの先輩達の活動を顧みると共に神奈川県放射線技師会との連携を保って、活動して行きたいと願っているのです。

創立 10 周年を節目に、これからも放射線技師としての生涯の仲間意識と医療界における職種の向上改善を図るため、皆さんと共に社会活動への芽を育てながら、会員仲間の融和を図って放射線に関する社会啓発活動への貢献を期待しています。

創立 10 周年記念を節目に更なる飛躍を望んでおりますので、会員皆さまの健康と共に益々の活躍をお祈りいたしますが、是非、記念式典行事に参加され、「放友会の仲間作り」を基本としながら、社会活動を考慮した会の存続とステップアップを促進するために、“夢を語り合うところ”の憩いの館」放談会に参加されることを要請いたします。

新老人パワーを結集し、任意団体である「神奈川放友会」をステップアップさせましょう。

気楽に集まり「過去を語り、現在を語り、未来を語ろう」

そんな「憩いの館」ですので、皆で育てましょう

記 念 式 典

日 時 2017 年(平成 29 年)11 月 11 日(土) 12:00 ~ 14:00

場 所 横浜中華街 市場通り 北京烤鴨店（ペキンカオヤーテン）

会 費 6,000 円

Tel 045-30-6677

内 容 記念式典

1. 会長挨拶
2. 10 年の経過報告
3. 来賓挨拶
4. 記念講演「復興 6 年！東日本大震災被災地を訪ねる」
5. 放談会 テーマ「これからの放友会活動を語る」
6. 閉会の言葉

会員の皆さん!! 元気なお姿を見せてください。

大いに語り合いましょう!!!

多数のご出席をお待ちしています。